

2022年度

帰国生入試問題

国語

湘南白百合学園中学校

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

こんなふうにして始まったオランダの小学校の生活で、私は人が変わったように明朗活発になり、それは二年後の日本への帰国の日まで続いた。

このような文化環境^{かんきよう}の変化による個人の^{*1}パーソナリティの変化はめずらしいことではない。

たとえば、^{*2}我妻・原はアメリカに留学した日本の若い女性に、今までの「ひっこみ思案」や「おとなしき」^{うす}が薄れて、はっきりと自分の意見を述べ感情の^{*3}表出も率直で豊かになることが広く観察されると述べる。そしてその理由として、留学した若い女性がもともと独立心や自己主張の強い性格の持ち主であったが、日本の文化が女性におとなしく静かで控えめ^{ひか}な役割行動を期待していたためそう行動していたのではないかと考察している。

しかしながら、当時一歳^{さい}の私が日本の伝統的な女性の役割行動にしたがって^{*4}生来の性質を抑えていたとは考えにくい。私は、異なる文化を持つ社会への移動による子どもの^{パーソナリティ}の変化は、むしろ自己と、これまでとは異なる対人関係のあり方を^{*5}内包する文化環境との^{*6}相互作用の結果であろうと思う。

自己の意志や気持ちを表現すればかなりの確率で他者にそれが受け入れられることが明らかになったとき、人ははじめはおずおずと自己表現を始める。またそれが^{けいぞくてき}継続的に受け入れられていくことにより、やがて率直に自己表現し、積極的、元気に行動できるようになるであろうと思う。逆に、自己の意志や気持ちを表現するたびに、周囲から拒否^{きよひ}されたり叱^{しか}られたりすれば、おのずと自分を抑えるようになるであろう。

オランダ語の習得とともに、私はオランダ人のコミュニケーションの基本的なあり方を先生やクラスメートのさまざまな状況^{じょうきよう}でのやりとりから学んでいった。日本では友だちの家でおやつや食事をすすめられたり、どこかへ一緒に^{いっしょ}遊びに連れて行ってあげると言われてもまずは遠慮^{えんりよ}するのが無難であるが、オランダではともかく素直に感謝を表すこと。また、うれしいことやいやなことがあったとき、日本ではとにかく目立たぬよう周囲に配慮して本音を隠^{かく}した無表情がいちばん^{*7}あたりさわりがなが、オランダでは喜びや悲しみ、時には怒^{いか}りの感情を率直に出してもよいこと。さらに日本の小学校では高学年ともなると先生に直接質問する子どもはあまりいないが、オランダではよくわからないことがあれば授業中活発に質問をしたり、先生の指示や学校のきまりの理由についても^{*8}臆^{おく}せずになぜでもよいことなど。

これは、自己抑制的な日本人とは対照的に、子どもの自己主張の発達に価値をおくオランダ人の対人行動のあり方である。

(中略) 個人の対人関係における自己表現は、その個人が属する文化の対人関係の価値によって枠づけられている。これまで、日本人の対人関係における自己表現については、あいまいであること、相手の属性(社会的地位、年齢、性など)や場面によって変化するように状況主義的であること、ことばそのものの表現よりも微妙な表情や素振り等の非言語によるコミュニケーションに依存する部分も大きいことなどが指摘されてきた。このようなコミュニケーション様式においては、メッセージの伝達に責任を負うのは送り手よりも受け手である。ゆえに、日本ではオブラートに包まれたメッセージから、いくつかの手がかりを基に、送り手の正確な意図を読み解くことのできる聞き手が尊重されてきた。日本人の場合、メッセージの送り手の明白な自己主張、すなわち自分の意志や気持ちを受け手が誤解することのないように、正直に正確に表現することはむしろ、あつかましい、くどいなど無礼で*。野暮であるとされる傾向にある。

このようなコミュニケーション様式は、対人関係における自己主張自体についての捉え方に根ざしている。自己主張は日本人の対人関係において*₁₀タブー視され、自己主張をする人は*₁₁自己本位であると考えられてきた。率直な気持ちの表出においてすら日本人は抑制する傾向にある。たとえば、アメリカで初めて訪れた家で「アイスクリームはいかがですか」とたずねられて、ちようど空腹であったにもかかわらず、欲しいということができず、相手がもう一度聞いてくれることや、遠慮している気持ちを察してアイスクリームを出してくれることを期待した、というような記述を読むとき、共感できる人も多いのではないだろうか。

一方、対人関係における自己主張に価値を見いだしているアメリカでは、さまざまな場面で自己の意志を表現し、実現する自己主張トレーニングの指導書が書かれている。アメリカでは自己主張できることを、安定した精神状態や幸福な社会生活に不可欠なものとして捉える傾向にある。なかには、高齢者の精神衛生と自己主張の関わりについて論じたものもある。そしてこれらの指導書では自己主張をする対象が、家族や友人などごく身近な人から、権威者(上司、先生など)、客の立場からサービスを提供する側に対して(たとえばレストランや店の従業員、例・お店で買物をしておつりが足りないことに気付いたとき、お店の人に言って返してもらうことができる)、見知らぬ人(たとえばお店などで順番を待って列に並んでいて割り込む人がいるとき自分が先に並んでいることを知らせる)にまで*₁₂多岐にわたっている。そしてそのこと自体、日本人とは対照的に、場面を越えて自己のパーソナリティの*₁₃一貫性を示すことをよしとするアメリカ人の対人関係のあり方の特徴を裏付ける。ま

た、これらの指導書は自己主張の苦手な人にあくまでコミュニケーションスキルとしての自己主張を身につける方法を*14 指南しているのであって、日本人のように個人が対人場面において自己主張すべきか否かの*15 是非の*16 葛藤を前提としていない。

アメリカ人は自己主張を尊重するが、その自己主張(アサーション)は同時に他者の権利の尊重を前提としており、他者を傷つけることを意図した、または他者の権利を否認する行動である攻撃性(アグレッション)とは明確に区別しようとしている。私自身の経験からも、アメリカの大学院では、自己主張の際に直接他者に批判をぶつけるような表現ではなく、相手の主張をまず認め、それから自分の意見を述べるというプロセスが奨励されていた。*17 目に余るような攻撃的な学生には、先生が一方的な意見であることを指摘したり、別の視点からもものを見ることを提案するなどして*18 牽制していた。

(佐藤淑子『イギリスのいい子日本のいい子』中公新書)

- *1 パーソナリティ：性格。
- *2 我妻・原は：我妻氏、原氏の論文によると
- *3 表出：表現。
- *4 生来：うまれつき。
- *5 内包：内部に含みもつこと。
- *6 相互作用：互いに働きかけること。
- *7 あたりさわり：さしさわり。
- *8 臆せず：おどおどせず。
- *9 野暮：洗練されていないこと。
- *10 タブー：触れたり口にしたたり出したりしてはならないとされること。
- *11 自己本位：自己中心。
- *12 多岐にわたる：物事が多方面にわたること。
- *13 一貫性：始めから終わりまで一つの考えで貫き通していること。
- *14 指南：教え導くこと。
- *15 是非：よいか悪いかの判断。
- *16 葛藤：心の中に違った考えがあってその選択に迷う状態。
- *17 目に余る：あまりにひどくて黙って見過ごすことが出来ない状態。
- *18 牽制：相手を監視または威圧することによって、行動を抑制すること。

問一 「自己主張する」ことについて日本人とアメリカ人はそれぞれどう考えていますか。本文のことはを用いて文にして答えなさい。

問二 海外生活を通じて、自分の性格やコミュニケーションの取り方に何か変化はありましたか。次の(注)に従い、具体例をあげて六〇〇字〜八〇〇字で書きなさい。

(注) ① 解答用紙は縦書きで、一行目から始めること。

② 表記は原稿用紙の用い方にしたがうこと。

③ 文章全体は三〜四段落程度の適切な段落で構成し、分かりやすく書くこと。

④ 一〇〇字以内を目安に、本文の内容にふれること。

⑤ 「具体的な例」では、自分の体験や経験をまじえること。

2022年度

湘南白百合学園帰国生入試【国語】

問一 解答用紙

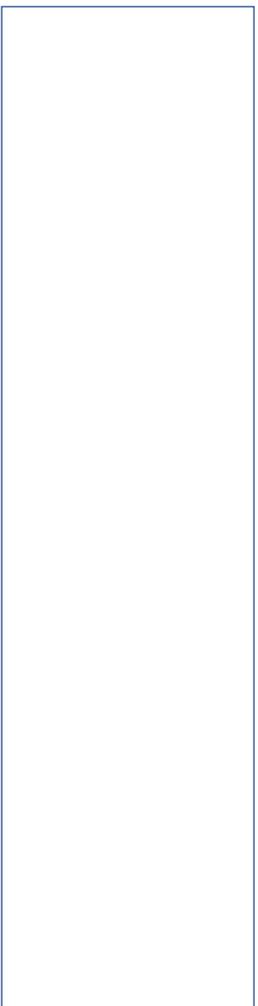
受験番号A方式 ≪ ≫

受験番号B方式 ≪ ≫

名前「 _____ 」

問一

日本



アメリカ

